# 日大の問題 氷山の一角

筑波大学教授

## 山口香氏

やまぐち・かおり
1984年世界柔道選手権女子52キロ級金メダリスト。筑波大教授。日本オリンピック委員会理事。53歳。

今回の騒動を見ていると違和感を感じる。関係者が、あれはあり得ない、とんでもないと批判している。どこにでもあり得る問題という論調ではなく、人ごとのように聞こえるからだ。

日大の内田前監督のやってきたこと、これは氷山の一角だ。どこのチームにも現在進行形で起きているかも知れない。例えば一人を標的にする。これは集団のいじめで、その一人を作ることにより周りをおびえさせ、逆らわない構造を作っていく。服従の構造は大学運動部から企業にまでどこにでもある。対岸の火事ではないのだ。

スポーツの指導者は一国一城の主で、指導現場には第三者の目が入りづらい。フェアプレーは頭にあっても、相手を出し抜くぐらい厳しい、ぎすぎすした勝負の世界。嘉納治五郎は「精力善用、自他共栄」と言ったが、力を持つ者が、力の「善用」の仕方を学ばなければ、大変なことになる。

女子柔道、レスリング等、警鐘となる事例が繰り返されても構造が変わらないのには、根深い理由もある。

1964年。施設も体制も恵まれていなかった東京五輪での金16個の快挙。私たちから言わせると、やっぱり我慢と根性だよね、となる。日本を高度成長に向け押し上げた時代の成功体験が、世代の記憶として染みついてきた。頑張れば何とかなる、やっただけ成果が出る。否定すれば、日本人の生き方を否定することにもなるので、容易には変えられない。断ち切るには、特定の年代より上は口を出さず、巨人の星ではなくキャプテン翼世代に委ねるぐらいの覚悟が必要になる。

日大アメフト部の選手たちが声明を出した。悪いと思っても言い出せない、逆らえない、そんな現実が窺え、やはり集団でしか声を上げられなかった、15人の女子柔道選手たちを思った。彼女らに話を聞いた時、皆おかしいとは言いながら、変えられない、言い出せない、と。選手たちは現役を終えても、その世界にずっと関わっていく。私も選手たちに、名前を公表して訴えても大丈夫とは言えなかった。それがスポーツ界の現実だ。

日本のアスリートには、小平奈緒選手のように、社会的な発信力や、ロールモデルになれる成熟さを持つ人が少ない。それは一面、スポーツ界と指導者が、人間的に成熟するように育てていないからだ。強化費をかけるのは、メダルを取るためでなく、人々を触発できる選手を育て、社会に還元するためではないのか。事件から学び、今の構造を見つめ直すことの本当の意味が、ここにあると思う。

（編集委員　結城和香子）